

森茂八商店を通して庶民の道具の価値、意味を考える

山口みなみ

本論の研究目的は、庶民の道具の価値、意味を考えることである。島貫悟はウィリアム・モリスと柳宗悦の民藝に関する認識を比較し、モリスは豊かな装飾性を持つ工芸品と簡素な工芸品のいずれも肯定する立場に立っていたのに対し、柳は中世の民衆によってつくられた庶民の道具の素朴な美しさを工芸美の本道とする立場に立つと言っている。本研究では、鶴岡市の荒物屋、森茂八商店の森久一さんへの聞き取りを加えて、庶民が用いた道具について考える。

世界では産業革命を機に、様々なモノが機械によって効率的に生産されるようになった。そして日本では高度経済成長期に入り、大量生産・大量消費の時代を迎えた。安価に抑えることができる中国製が増加し、機械化がどんどん発展していった。その影響もあり、現在の私たちは安くて軽くて丈夫な、庶民の道具を容易に入手できるようになった。柳宗悦の唱えた「美しさを持つ民藝（庶民の道具）」とは、道具の価値、意味が移り変わってしまっている。

本研究では少なくとも 1820 年から続く鶴岡市の荒物屋、森茂八商店を訪ね、取り扱っている品物を調査しながら、森さんに聞き取りを行った。使う人が少なくなり、作り手もどんどん減っている道具を 1 つひとつ記録しながら、どこで作られ、どのような材料で作られていたのかを明らかにした。森さんの話からは、庶民の道具に対する、モリスとも柳とも異なる捉え方、価値観が伺われた。それが森茂八商店に並んでいる商品の 1 つひとつに表れている。昔と変わらぬ品物の中には、より丈夫にするため、部分的にプラスチックやビニールが使われているものもある。柳なら、このように変化した道具は否定し、民藝とは呼ばなかっただろう。しかし、森さんは違う。それを森さんは商業的視点だというのが、そもそも庶民の道具とはそういうものではないだろうか。店に並ぶ商品たちは、庶民による庶民のための小さな工夫や進化が施されてであると森さんは解説する。

最後に、庶民の道具が変化した転換点であり、荒物屋の衰退の原因と森さんが力説する“プラスチックの発展”について考えた。プラスチックは戦後急速に普及し、農山村で身のまわりの自然素材から作られてきた民具を駆逐した。興味深いのは、それを語る森久一さんの、客観的で淡々とした口調である。森茂八商店は、今ではほとんど無くなってしまった民具店が続けているが、稼ぎの中心は別の分野に移している。だから続けていられると言えるのだが、時代が変わっていくことは当然で、庶民の暮らしもそれに沿って変わるものだと考えている。しかしその中でも、ときどき工夫や美が見え隠れする。そうした庶民の道具に対する理解は、モリスとも柳とも違い、より庶民の道具を捉えているように思えた。お店の奥に置かれた PP バンド製のプラかごにも、庶民の道具に対する森茂八商店の考え方が表れている。